

K240.2

2a

暫定
中等歷史
一

文部省

[前]Y,30

(41)

目 録

一 古代のアジア	一
(一) 支那の黎明	一
(二) 周の文化	二
(三) 古代インドと佛教	三
二 アジア諸民族の交渉	四
(一) 支那の統一と北邊・西域	四
(二) 北方民族の活動と南方各地	八
三 アジア諸文化の興隆	十一
(一) 隋・唐と東・北アジア	十一
(二) 唐の文化	十三

昭和21年4月17日印刷 同日翻刻印刷
昭和21年4月21日發行 同日翻刻發行
(昭和21年4月21日 文部省検査済)

著作権所有 著 作 者
發 行 者

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Apr. 17, 1946)

翻刻發行者

印 刷 者

文 部 省

東京都神田區岩本町三番地

中等學校教科書株式會社

代表者 龜 井 寅 雄

東京都千代田區市谷區町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間 長 吉郎

一、古代のアジア

(一) 支那の黎明

古帝王の傳説 アジアの歴史に大きな役割をになつた漢民族は、黄河によつてうるほされる北支那の黄土地帯にその文化を開いた。古へを向ふ漢民族は古代を以つて理想の時代と考へ、多くの傳説を残した。それによると、今から四千數百年前に黃帝といふ偉大な人物が出て、初めて國を建て、その後、堯や舜といふ聖人が相次いで現れたといはれてゐる。

思ふに、太古の支那民族は氏族を單位とする多くの部落に分れ、農業を営む傍ら牧畜をも行なひ、その間に部落がしだいに大きくまとめられたのである。かくて、これを統べる君長が現れたが、それが誰であり、いつのことかは明らかでない。

夏と殷 今から凡そ四千年前に、禹といふ聖人が現れ、長らく黄河の治水に努め、遂に成功して人望を得、夏といふ王朝を建て、子孫が代々王位を繼いだと傳へ、

られてゐる。これには、北支那の政治に治水が極めて大切で、國家の強い力を必要としたことなどが示されてゐる。

夏は、四百餘年続いた後、殷に滅され、殷もまた、六百餘年を経て周に倒されたといふ。近頃、北支那の各地から掘り出された三足形の土器や、殷の都の跡(河南省安陽縣)から出た龜甲・獸骨の文字などを見ると、支那古代文化の進歩を知ることができる。

周代 殷を滅した周の武王は、西安の附近に都をさだめ、同族や功臣に領地を與へて諸侯とした。その弟の周公はすこぶる賢明で、武王及びその子成王を助け、制度を整へ文化を進めたので、後世から聖人として尊ばれてゐる。しかし周は、その後やうやく衰へ、西方民族の壓迫によつて、都を今の洛陽の附近に遷した(西暦前七七〇)。

以後の五百餘年間を東周の世といひ、その前期三百餘年間を春秋時代と呼ぶ。當時、周の國勢はいよゝゝ衰へるばかりで、しきりに他民族の壓迫を蒙つた。かくて大諸侯が次々に立ち、周室の防衛、外敵の壓退を

唱へて他の諸侯に號令し、世に覇者といはれた。

東周の後期二百餘年間は戰國時代である。この時代は、實力の世の中で、周の王室は全く名ばかりとなり、大諸侯は他を従へてみづから王と稱した。やがて、西北に據つてゐた秦が最も強大となり、先づ周を滅し（前二五六）、ついで他の諸侯を合はせて支那を統一した（前二二一）。

春秋以來、諸侯が國力の増強、領土の擴張に努めたので、漢民族の勢力は四方に廣まり、文化もまた大いに發展して、特に政治や外交が著しく活氣を呈した。

（二）周の文化

支那の國から古來、支那では幾たびとなく王朝の興亡が繰り返された。天を敬ふ心の厚い漢民族は、この事實を解するのに、王者は天の代理者であり、王者が他の勢力者にとつて代られるのは、天の命が革まつたためであるとした。このやうな考へから、治者と被治者との間とはかく隔てられ、これが王朝の變動を絶えず引き起す原因となつたのである。

周の制度と社會 周は、領内を治めるのに、封建制度を用いた。即ち、都の周圍を王室の直轄地となし、その他の地方は諸侯に治めさせたのである。これを統べるためには、中央に多くの役所を置き、また學校や軍隊の制度を整へた。そして井田法といふ田地の制度を作つたと傳へられてゐる。これは、わが國の十五、六町歩に當る正方形の田地を井字形に九等分し、中央の二區を公田とし、他を八家に等分するとともに、公田を八家共同で耕作させ、その收穫を租税とする方法である。租税としては、このほか、絹などを納めさせたり、勞役に従はせたりすることも定められた。なほ諸侯の政治もほゞこれと同様であつた。

周代には、上に天子・諸侯及び士族があつて、一般の人民を支配してゐた。人々の生活では、家族制度が發達して孝が百行の本として尙はれ、長幼の序を守ることも重んぜられた。婚禮や葬式を、てあつくする風俗も、ほゞこの頃から始つたのである。

然るに、春秋・戰國の世になると、周初の諸制度や社會の秩序が亂れ、諸侯は競つて富國強兵に努めた。

かくて、商工業が目だつて進み、また學問も大いに發達した。當時の學者は、世を救ひ、國を治め、或は自己の立身をはかるため、種々の學說を立てたので、諸子百家といはれるほど學問が榮え、後世まで大きな影響を與へた。中でも、孔子・孟子及び老子が、最も有名である。

孔子と諸子百家 孔子は、春秋時代の末に、山東の曲阜（魯の國）に生まれ、孝悌忠恕を重んじ、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平和にする教へを説き、最高の道德を仁と名づけた。一時、魯の大臣になり、

まだ諸國を廻つて教へを説いたが、亂世のこととて、これに耳を傾ける諸侯は甚だ少かつた。そこで孔子はひたすら著述と子弟の教育とに努め、萬世の師と仰がれるに至つた。その教へは儒教と呼ばれ、戰國中頃の孟子その他に受け繼がれて、後世の支那はもとより、わが國にも少からぬ影響を與へた。

孔子關係の著述で、特に名高いのは、「春秋」と「論語」とである。春秋は、魯の歴史で、孔子が魯王思想に基づいて著したものといはれる。論語は、孔子及びその一門の言行

を弟子が書き集めたもので、「大學」中庸及び「孟子」ともに、世に四書と呼ばれ、儒教の經典とされてゐる。

老子は、無爲自然の道を説き、やがて莊子がこれを發展させて、世に道家といはれた。後に、その教へは儒教とともに、支那の二大思想を形成した。その他、兼愛を唱へる墨家、法を嚴にし富國強兵を説く法家、また孫子・吳子らの兵法家などが續々と現れ、春秋・戰國時代の學問・思想は、すこぶる活況を呈した。

（三）古代インドと佛教

古代のインド インダス河の流域は、史前文化の遺蹟に徴して明らかなやうに、アジアの中でも早く文化の開けた所である。その後、今から凡そ四千年前に、アーリヤ民族がこの地へはいり、先住諸民族を従へて、次第に東方ガンジス河の流域に發展した。かれらは初め主として牧畜を營んでゐたが、しだいに農業を學び、多くの部落に分れて定住し、それが時とともに幾つかの王國にまとめられた。

上古のインドには、僧族・士族・平民・奴隸の四階

級があつた。最上位の僧族は、婆羅門と呼ばれて、すぐれた宗教や文學を生み出し、婆羅門教の勢力をかりて、他の階級を壓迫した。インドの文化は、その頃既に宗教が中心をなし、現世の生活を重んずる支那文化とは異なり、すぐる特色あるもので、政治や産業は軽んぜられた。その上、土地が廣く民族が難多で、稀に統一されても、國家に永續性がなく、殊にその階級制度は、常に愛國思想や獨立運動の妨げとなつて、今日に至つてゐる。

佛教の成立 婆羅門階級の腐敗・横暴が甚だしくなると、孔子とほぼ同じ頃に、釋迦が現れて佛教を唱へた。釋迦は、深い慈悲心を以つて、人々の苦しみを救はうとし、我慾にとらはれず、正しい道に従つて修行すれば、安らかな覺りが開けることを説いた。

釋迦は、ヒマラヤ山麓のカピラ城主の子で悉達多と呼ばれた。二十九歳の時に出家し、固い決心を以つて六年間苦難の修行を続け、遂にブダガヤの菩提樹の下で佛覺者となつた。その後、四十餘年の間、その教へを説き、多くの信者を得て、八十歳でなくなつた。

アソカ王と佛教 支那の戰國時代頃に、中部インドのマガダ國が發展し、秦の支那統一の少し前に、アソカ王が即位すると(前二七三)、初めてアーリヤ民族によるインド大部の統一が成つた。王は深く佛教を信じ、種々の慈善・公益事業を興すとともに、外國にも布教者を遣はして、その教へを弘めた。かくて佛教はインドはもとより、周圍の各地方にまで傳はつたのである。

その後、佛教は中央アジアから支那に傳はり、更にわが國に攝取されて、大いに發展した。このほか、セイロン島からビルマ・シヤム・インド支那等、南方諸地域に傳はつたものや、チベットから滿洲・蒙古方面に弘まつたものなどがあり、今なほ各地に行なはれて、アジア文化の一大要素を形成してゐる。

二 アジア諸民族の交渉

(一) 支那の統一と北邊・西域

秦の統一 支那の西北に興り、長い間、富國強兵に、

努めて來た秦は、遂に始皇帝の時に支那を統一して、中央に權力を集め、全國を郡縣に分け、官吏を遣はして一様の政治を行なはしめた。帝が文字や度量衡を統一し、阿房宮といふ大宮殿を建てたり、各地を巡幸したことなどは、すべてこの専制君主の統一政策から出たものである。なほ帝は民間の政治に關する書物を焼き捨て、政治をそしつた儒者四百餘名を坑に埋めて言論の統一をはかつた。

始皇帝は、外に向かつて大いに力を伸し、北方のフン族匈奴を撃ち退け、萬里の長城を築いて邊境を固めたほか、南支那の越人を討つて、今の廣東方面をも治めた。かの萬里の長城は、戰國時代から北支那の諸國が北方民族を防ぐために築いてゐた城壁を増強したもので、今の長城より少し北方にあつた。當時は土壘を主としたが、世界に稀な大工事で、よく古代支那の國勢を物語つてゐる。

かくて漢民族の勢力は、今の支那本部の大部分に及び、更に秦の名が遠く海外にも知られたので、遂にこれが説つて支那といふ國名を生ずるに至つたといふ。

前漢の發展 始皇帝は、内外に互る大事業を成し遂げたが、その反面、國民を餘りに強く抑へつけたので帝の死後、各地に反亂が起つた。その時、民間から出た劉邦と、貴族の家に生まれた項羽とが互に覇權を争ひ、遂に劉邦が支那を統一して帝位に即き(前二〇二)、前漢(または西漢)の高祖といはれ、長安(今の西安附近)に都した。

高祖は、周の封建と秦の郡縣とを合はせた郡國制度を立て、都の周邊には郡縣制をしき、遠隔の諸地域には功臣または同族の諸王を封じた。高祖の後三、四代の間は多少の動搖もあつたが、第五代の武帝が建元元年(前二四〇)東亞年號の初めに即位した頃には、漢の中央集權がほぼ完成し、財政も豊かとなつた。かくて武帝は、治世五十四年間に、儒教によつて國內の思想を統一し、更に四方に向かつて、大いに發展を試みた。

武帝は先づ北方の強敵フン族を撃ち破つて、これをゴビ(沙漠)の北に退け、西には敦煌郡等を置き(前一一二)、更に西域に張騫を遣はして、通商を開いた。また秦末に獨立した南支那の南越國を合はせ、日南郡等を

置いて南海貿易を進め、別に南滿洲や北朝鮮にも郡縣を置き、その勢威を及ぼした。漢の文化はひいてわが國にも影響を與へた。

たゞ武帝は、連年の莫大な戦費を得るため、官爵を賣り、塩・鐵・酒の專賣を行なひ、民に重税をかけたので、一時は各地に不平が起つた。しかし、それもやがて静まり、武帝以後やうやく國內が安定するとともに、西域都護府を置いて、今の新疆地方をも支配するに至つた。やがて王爺は無力となり、外戚の王莽のために滅されてしまつた（西紀八）。

王莽と後漢 王莽は、儒教を尙ぶ風を惡用して恭儉をよほひ、豫言流行の俗に乗じて民に革命を信ぜしめ、遂に漢を倒して帝位に即いた。しかし、ごまかしの政治は、忽ち世人を失望せしめ、僅かに十五年で亡びた。かくて漢は、光武帝によつて復興され、都は洛陽に遷つた（二五）。これを後漢（東漢）といふ。

後漢の世には、王莽時代の惡風も消え、大義名分が正されて、幾多の名士の出現を見た。なほ、後漢の初期には班超が遠征して西域方面を鎮め、西域都護府が

復活された（九一）。班超は、更に部將を遣はしてローマ帝國との交易を開かうとしたが、その目的を達しなかつた。しかしその後、ローマ皇帝の使者と稱する者が海路から南支那に到り（一六六）、東西の交通がしだいに開けた。かゝる間に、インドの佛教も、中央アジアを経て支那に傳はり、後漢の末期には、西域の僧侶が支那を訪れた。かくて、經文も少しづつ漢譯されたが、佛教は、まだ廣く民間に行なはれるには至らなかつた。

後漢も半ばを過ぎる頃から、王室が衰へ、外戚や宦官が横暴を極めるやうになつた。中央の威信がなくなると、地方の秩序は各地の豪族によつて維持されるに至り、やがて群雄割據の形勢を招いた。かくて漢は滅亡し（二三〇）、支那は分裂して三國となつたのである。

漢の學問 武帝以前の思想界は、秦の壓迫を受けた後のこととて、餘り振るはず、まだ法家や道家の説が雜然と行なはれてゐた。そこで武帝は、董仲舒の意見を用ひ、儒教を以つて國民の思想を統一し、大學を設けて官吏を養成した。

漢の儒家は、孔孟の道を説くことよりも、訓詁即ち經書の字句の解釋に熱申した。しかも漢代四百年の間に、儒學は一般にも普及して、以後、支那の學問の代表となつた。かくて漢代には、支那の文化が一定の型を整へたばかりでなく、それが滿鮮からわが國にまで波及したので、後世支那の事物をさす時には、漢字・漢文などと漢の字が多く用ひられるのである。

武帝の時には、また歴史や文學も盛んで、司馬遷は「史記」を作り、司馬相如は詩文を以つて有名であつた。なほ後漢の班固が著した「漢書」も「史記」とともに、後世から史書の模範とされてゐる。

漢代の社會 漢では、農業が重んぜられるとともに、戰國以來發達して來た商業もますます盛んになり、貨幣の使用もかなり廣まつて、各地に豪族が現れた。なほ支那では、文書の材料として古く竹・木・絹等が用ひられたが、後漢に至つて紙が發明され、文化の普及に役立つた。漢代に於ける支那の全人口は凡そ六千萬といはれ、多くは北支那や中支那に住み、これら兩地域に經濟や文化を發達せしめた。

北支那の中でも、黄河の中流域は特に重要で、古來、中原の稱がある。秦滅亡後の覇權の爭奪に因んで「中原ノ鹿ヲ逐フ」といふ語が生まれ、後世利を爭ふことを逐鹿といつてゐる。また利を貪つて足ることを知らないのを「鹿ヲ得テマク蜀ヲ望ム」などといふが、これは後漢初代の天子光武帝が隴右を平け、更に蜀を伐たんとした時の語で、蜀は大體今の四川省に當り、隴はその北方、陝西・甘肅兩省にまたがる一地方名である。

北邊と西域 漢初のフン族は、多數の騎兵をもち、大體今の蒙疆の邊を根城にして漢の高祖の軍を破り、以後年々物資を要求して漢朝を壓した。かれらは、漢の降臣を利用して強固な國をつくり、シベリヤや西域を通じて、種々の文化をも受け入れてゐた。かの武帝の北方征伐は、國家の防衛とともに、西域交通路の開拓をも目ざすものであつた。武帝は、更に張騫を西域に遣はして、大月氏國との同盟をはかつたのである。同盟は成功しなかつたが、これによつて西域の事情が漢に知られ、兩者の交通も開かれた。ぶだう・さくろなど、西方の珍しい品物が支那に傳はり、また漢の絹

が遠くローマの市場にまで現れたのは、その結果であつた。

漢とフン族の衝突の裏には、東亞貿易の利害關係もひそんでゐたのであるが、今のイランにあつたバルチヤ(安息)も、支那とローマとの仲だちをして、貿易の利を占めてゐた。またその東北のバクトリヤには、後漢の中頃カニシカ王が出て、インドの西北からガンジス河の中流地方までを領有し、大いに佛教を發展せしめた。殊にガンダーラ地方では、そこに來てゐたギリシヤ人も、進んで佛教を信じ、西方の技術を以つて佛像を造つた。世にこれをガンダーラ美術と稱する。後に支那からわが國へ傳はつた佛教文化には、この系統の藝術も含まれてゐる。

(一) 北方民族の活動と南方各地

三國・西晉時代 後漢の末、各地に起つた反亂は、その後しだいに静まつて、支那は遂に魏(都は洛陽)・吳(都は南京)・蜀漢(都は成都)の三國に分れた。

魏は北支那を統一し、後漢の譲りを受けた形で國を

建て、南滿・北鮮にも發展して、最も強大であつた。吳はほゞ支那の中部以南を領有し、揚子江沿岸の開発と南方貿易の振興とに努めて國富を増した。蜀漢は、名臣諸葛亮(字は孔明)を得て、よく天下三分の形勢を保つた。しかし蜀漢は、孔明の死後とみに振るはず、先づ魏に滅され、ついで魏も、權臣司馬氏の西晉(都は洛陽)に國を奪はれた。西晉は、やがて吳を倒して支那を統一した(二八〇)。

三國の頃は、戰亂が打ち續いたので武勇が尚ばれた。蜀漢の勇將關羽の廟は、今も武廟といはれてゐる。西晉は諸王を封じ、小成に安んじて、武備を怠つたので、先づ諸王の争ひを生じ、ついで地方に騷亂が起り、それに乘じて滿・蒙・西蔵等の諸民族が、北支那にはいり、西晉を滅し(三二六)、漢民族と入り亂れ、多數小國家の亂立・興亡時代となつた。

東晉と江北の諸國 諸民族が北支那にはいると、その地の漢人貴族は、多く南支那に移り、西晉の一族をより立てて建康(南京)に都し(三二七)、僅かに江南の地を保つて東晉を建てた。晉の南渡は支那文化南遷の一

時期を劃す出來事である。

北方では、西蔵族の前秦がやがて北支那を統一し、大軍を率ゐて東晉を討たうとしたが、肥水(安徽省)の一戰で大敗し(三八三)、却つて北支那の混亂を招いた。南方の東晉でも、この後、國勢が衰へて遂にその部下に滅され、宋の世となつた(四二〇)。この頃、北支那では、滿蒙系の後魏が優勢となり、遂に江北を統一し(四三九)、宋と對立して、こゝに南北朝時代を迎へた。

そも、これら諸民族は、早くから長城附近に移住してゐたので、既に支那文化を知り、大いに漢人を用ひて君權を強化してゐた。しかし、かれらは、必ずしも各民族の總力を擧げて支那に移つたのではなく、且つ漢民族との調和もうまく行かないため、しきりに興亡を繰り返した。一方、東晉では、貴族の勢力が強くと、西晉以來一般に道家の説をよるこび、清談と稱して世事を練んじ、空理空論に耽る者が多く、そのため國力は餘り振るはなかつた。

南北朝時代 後魏は、北支那を統一して後、西域を従へ、蒙古を征伐して、すこぶる強國となつたが、や

がて支那文化に溺れた。孝文帝の時には、都を平城(大同)から洛陽に遷し(四九三)、言葉や風俗を支那風に改め、支那人との通婚をすゝめたほどである。かくて、その文化は進歩したけれども、北方固有の剛健な氣風が失はれ、政治は亂れて、遂に後魏は東西に分裂した(五三五)。その後、西魏を奪つた北周は、漢人を用ひて政治を改革し、北支那を統一したが、間もなく漢民族の隋に滅された(五八二)。

一方、南朝では、この間、宋・齊・梁・陳の四朝が交代したが、政治や社會に大きな變化はなかつた。なほ、梁の武帝は、博學多能であり、またよく文藝をすすめたので、東晉以來發達して來た貴族文化は、この時にほゞ完成した。その後、南朝は更に振るはず、隋に併合された(五八九)。

南朝では、東晉以來、貴族の勢力が強く、門閥を尚び、官吏も家からによつて任用を異にし、貴族と庶民との間には越えがたい身分上の差別があつた。北朝でも、社會が安定するにつれて、この傾向が強くなり、貴族によつて政治が左右された。

宗教と文藝 佛教は、諸民族が相争つて社會の不安が増すにつれて、人々が安心立命をこゝに求めたので、民間に盛んに行なはれた。北方では、諸國家亂立時代に敦煌の千佛洞、後魏の世に雲岡(大同郊外)龍門(洛陽郊外)などの大石窟寺院が國家の力で造られたが、時には廢佛の斷行されることもあつた。これに反し、南方では、貴族佛教の傾向が強かつた。なほ當時、西域の高僧の支那に來たつた者、支那僧のインド方面に旅行した者も多く、教理も次第に明らかになつて、禪宗や淨土宗なども現れ始めた。

漢民族は古くから、治病・長生・福祿などに強い願ひをもつてゐた。道教は、かゝる目的で生まれた諸信仰と、道家の思想とが結びついて、後漢の末に成立した宗教であるが、間もなく佛教の強い影響を受け、南北朝になると、佛教に對立するほどの大宗教となり、廣く各地に流行した。

魏晉以來、江南地方が開發され、南朝の頃には、北支那に劣らぬ特色ある文藝が發達した。中でも、詩文はすこぶる流行し、一般に美しい對句をよるこぶ風があつた。

あつた。晉・宋の間に出了た名人陶淵明は脱俗の風格を以つてたゞへられ、その詩は後世わが國でも愛好された。藝術では、東晉の世に、書道の王羲之、繪畫の顧恺之が現れ、支那藝術の大本を立て、今なほ書聖・畫聖として尊ばれてゐる。北朝でも、今に残る石窟寺院などからもうかゞはれるやうに、美術の進歩が著しかつた。この間、儒教は、學問としては振るはなかつたが、國家の制度や日常の生活には、相當の勢力をもつてゐた。

鮮満地方 漢から西晉に至る頃、南滿洲及び北朝鮮には、北支那諸朝の勢力が及んでゐた。初め北滿洲に夫餘といふ國が興り、ついで、その東南の高句麗國がこれに代つて、南滿・北鮮の地を合はせ、都を平壤に遷した(四二七)。これら二國は、滿洲民族による最初の統一國家であつた。當時、南朝鮮には新羅及び百濟があつて、高句麗と相争つてゐた。

インドと東南アジア インドでは、アソカ王以後、多くの王朝が交代したが、東晉の初め頃(三二〇)グプタ王朝が興つて、凡そ三百三十年、わが大化改新の頃の木綿が有名となつた。總じて、これら各時代を通じて、東南アジアは、支那やインドの影響を受けて、文化もかなり進んでゐた。

三 アジア諸文化の興隆

(一) 隋・唐と東・北アジア

まで續いた。婆羅門教とともに、佛教もまた盛んで、文學や美術が大いに發達した。
また東南アジアでは、その地の固有文化にインド系の文化が流れ入つて、大きな感化を與へてゐた。即ちビルマ地方では、既に後漢の頃から王國があつて使者を支那に遣はし、西方遙かにローマとも交通してゐた。ジャワもまた、早くからインド方面に知られ、マライ半島などとともに、インドの住民が少からずこの地に移つた。また今のカンボジア方面に扶南國が出来たのも三國時代頃であり、吳の使者がその國に行つてからは、支那にも南方各地の事情が通じた。扶南は、その後も南方の雄國として南朝と交通し、佛像などもたらしたが、南北朝の末頃、その北隣の眞臘國に攻められて衰へた。

なほ、東部インド支那の北半は、前漢の武帝以來、ほぼ支那の統治を受けてゐたので、支那文化が傳はり、今日でも漢代の古錢・古鏡などが多く發見される。その南方、扶南の東に、林邑國が後漢の末に興り、支那と南海の中間貿易地として發展し、南朝の頃には、そ

隋と高句麗 南北朝を合はせた隋は、治下の諸勢力をまとめて、強い統一國家を組織することに努めた。全國の諸州に寺塔を建て、佛教による教化を試みたのも、大運河を開いて豊富な江南の物資の輸送路としたのも、すべてこれがためである。またその間、四方に國威を誇つたので、西域・南海の諸國で、これに従ふものが少くなかつた。

そも、わが朝廷は南北朝の頃から支那と通交し、その文化の刺激を受けてゐたが、隋の時代となるや、聖德太子は、少しもその威勢に屈することなく、對等の禮を以つて交際を結び、積極的に大陸文化を攝取する道をひらかれた。推古天皇の十五年(六〇七)、小野

妹子をして隋帝にもたらした國書に「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す、恙なきや」とあるのは、外交上に於ける太子の確乎たる信念を示すものであつた。

その隋も、なほ國內の統一が不十分であつたため、遂に數回に互る高句麗征伐の失敗がもとで各地に反亂が起り、僅か三十八年で亡びた(六一八)。このやうに隋の興亡はまことにあわただしいものであつたが、南・北兩支那をまとめ、制度文物に於いても、唐代の基礎を築くなど歴史上の役割は大きかつた。

唐の發展 隋に代つた唐では、第二代の太宗が稀に見る英主で、文武に通じ、よく賢臣の諫めを容れ、また名將を巧みに用ひて國の基を固め、その政治は世に貞觀の治とたゞへられた。なほ、この前後六十餘年間、唐は大いに外に發展し、北朝の末から盛んとなつた突厥(トルコ族)を撃滅し、西域地方を合はせて、西南アジア方面にも國威を輝かせた。

かくて唐は、六つの都護府を各方面に置き、四方の諸民族を鎮めさせた。都護府の長官たる都護には、軍

政と民政とを兼ねさせ、その下に各地の王や酋長をそのまゝ地方官に任命した。これら外地諸州の数は、内地のその二倍に餘り、インド・西南アジアを除く大陸の大部分が、唐の勢力範圍に屬したのである。

唐の盛衰 初唐六、七十年の後、一時唐朝は武氏(第三代高宗の後)に奪はれたが、第六代の玄宗が唐室を強化し、文化を進めて開元の盛世をうたはれた。その都長安には、廣くアジアの諸民族が集り、人口百萬を超えて世界第一の大都市となり、異國の風俗も大いに流行した。

しかし唐の繁榮も、これが絶頂であつた。これより先、唐では異民族の侵入にそなへて北邊に節度使を設けたが、玄宗の代にはこれを増置した。ところが節度使の二人なる胡人出身の安祿山は、玄宗が晩年政治にあきて、遊樂に耽つたのに乘じて大亂を起し(七五五)、唐の國基をゆるがせた。以後、漢民族と諸民族との協調が破れ、しきりに國境を侵された上、内地では節度使が跋扈し、宮中でも宦官が政治を亂した。かくて唐は、遂に亡びた(九〇七)。

突厥と西域

北朝の末に蒙古の西北方から突厥が興つて、附近に勢を振るひ、やがて隋の頃に、東西に分れた。東突厥は、唐の建國を助けたので、自然唐を侮つてしばしば支那に進出したが、遂に太宗に滅され(六三〇)、西突厥もまた、ついで敗れた(六五七)。突厥は、支那や西域の文化を取り、その文字は、今日知られてゐる北方民族の文字の中で、最も古いものである。

突厥の勢が衰へると、今の新疆地方の諸國も、唐に従ひ、唐の西域貿易が發展した。しかし北方には、またもやウイグル(トルコ族)が興つて漠北に勢力を張り、盛んに唐の邊境を侵し、種々の物資を強要して唐朝を苦しめた。

渤海の興起 渤海は、わが奈良時代の初め、今の滿洲の地に興り(七二三)、二百餘年間続いた王國で、上京(今の東京城址)を首都とし、諸制度を設けて海東の盛國といはれた。この國は高句麗の後を承けた滿洲民族の獨立國家で、しきりに唐の文化を輸入するとともに、高句麗の例にならひ、わが國にも聖武天皇の御代から約三十回も朝貢して來た。わが朝廷でも、その使節を

優遇し、また答禮の使を遣はされた。

(二) 唐の文化

諸制度 唐の制度は、隋の制度をもとし、なほ歷朝の制度を參照して、これを大成したものである。官制では、中央に詔令を立案する中書省、それを審議する門下省、及び行政を總理する尚書省があり、その下に政務を分掌する六部(吏・戸・禮・兵・刑・工)が置かれた。地方は、これを道・州・縣に分け、それら官吏を任じて政治を行はしめた。

田制では、均田制といつて、人民に規定の官田を給し、税役には租(麥・米を納入)庸(年に二十日の勞役)調(絹などを納入)雜徭(附加の勞役)などの定めがあつた。兵制は、初め均田を受けた丁男を、冬期に訓練する徵兵制度を立てたが、均田制が唐の中頃からすたれると、傭兵制度となり、やがて税法も貧富によつて割り當てることになつた。なほ都や州・縣に諸學校を設け、その卒業生を科目に分けて試験し、合格者を官吏に任用した。これがいはゆる科擧の制であるが、これによつ

て従来の門閥主義がすたれ、實力のある者ならば身分の如何を問はず、官位につく道がひらけたのである。支那では、官吏となることが非常な名譽とされ、またいろいろの利益も伴つたから、その志望者は甚だ多かつた。以上の諸制度は、後世の模範となつた。

宗教と學藝 宗教の盛況は、唐代文化の二特色である。道教は、諸帝に尊ばれ、更に晩唐には、社會の不安に乗じて廣く世間に行なはれ、他の宗教が禁止されるほどであつた。佛教は、貴族と結んで社會の上層部に著しく發展し、玄宗の頃までに、支那佛教の各宗派が大成された。この間、西域や南海の交通路を利用して多くの名僧が渡來するとともに、玄奘・義淨らは長年のインド旅行の後、その旅行記を著し、また重要な經典の翻譯を果した。

次に西南アジア系の諸宗教も、ゾラッストラ教（祆教）・マニ教・ネストリウス教（景教）及びイスラム教（回教）などが、在唐の諸民族にはもちろん、漢民族一部の間にも行なはれた。

唐代文化の花と咲き誇つたものに詩文がある。殊に

詩は、玄宗の頃に李白（太白）杜甫（子美）の二大詩人が現れて、空前の發展を遂げた。文はやゝこれにおくれ、安祿山の亂後、韓愈（退之）柳宗元（子厚）の二文豪が出て、大いに振るつた。わが平安時代にもはやされた詩人、白居易（樂天）が現れたのは、この後である。なほ唐初には、歐陽詢・褚遂良らによつて書道が大いに進み、繪畫も山水畫・人物畫に諸名家を出した。佛像もまたこの時代の作品にすぐれたものが少くない。

唐代文化の特質 唐代の制度・文物は必ずしも漢民族のみの力で出来たものではなく、いはばアジア諸民族の協力によつて成立したものである。したがつて開闢の諸民族・諸國家は、これに大いなる關心を寄せ、且つ喜んでこれを攝取したのであつた。わが國からも使節や學者・僧侶達がたび／＼唐に赴き、熱心にこれを研究して歸つた。わが奈良朝・平安朝の文化は全く唐代文化の縮圖ともいふべく、殊に大化の改新は唐代文化の刺戟によるところ多大である。唐に渡つた粟田真人や阿倍仲麻呂らは、いづれもがの地で、盛名をうたはれ、更に桓武天皇の御孫眞如親王は、唐の佛教に

暫定 中等歴史 一

文部省

(後) ¥ .55

(41)